

巻頭言

〔年報〕第五集

私が近年持ちつづけている最大のテーマは、「自然と人間」ということです。しかもそれについて私の思考の内実は、時とともに憂慮の色合いを深めてきています。時折り講堂で学生に語りかける「人生論」においても、二十年続けている王朝女流文学史の講義においても、また一年に数回発行される「比治山女子短大新聞」に寄せる文章においても、このテーマに触れることが多くなりました。このような傾向は、第三者の眼には、あるいは執拗に過ぎると映るかも知れません。それでも、相変わらず性懲りもなく、このテーマにこだわりつづけています。

このような私の近來の関心を強く刺戟した事件——そうです、やはり事件と申してよい事柄を取り上げてみたいと思います。

それは、女流俳人として俳壇の第一線で活躍している稲畑汀子さんが、昨年四月十六日付けの朝日新聞文化欄に載せた「ドイツで季語を語る」という題の報告についてです。

俳句は最近日本でも盛んで、俳句ブームといってよいような現象が見られるのは、周知の通りですが、これは日本だけでなく、世界的なものだといわれます。昨年三月、稲畑さんは、西ドイツのミュンヘン独日協会の招きで、俳句の講演をするためにミュンヘンを訪れました。そして、西ドイツの俳句への関心は、決してブームといわれるような浮わついたものではないことを、身をもって感じたといっています。この時、日本から稲畑さんを含めて七名の俳人が行ったそうですが、初めの日は、日独合同で俳句についての討論会と俳句会があり、翌日、「俳句にとつての季題の意味」と題する稲畑さんの講演があったといっています。講演をすませたあとの熱気の中で、小さなパーティーに移り、講演について浴びるような質問をうけたそうです。

翌日ローマに行き、パチカンを訪れた時、稲畑さんは思いがけなく、教皇様に謁見を賜わり、日本語でお言葉を頂いたそうです。そのお言葉というのは――

……お会い出来て心からうれしく思います。俳句は短い言葉の中に深い意味を込める芸術と聞いています。みなさんが俳句を以て人々の心を豊かにされると共に、ますますすぐれた作品を生み出されるよう期待します。

稲畑さんは、感激の涙をこらえながら、昨日の自分の講演の最後の言葉を、心の中で教皇様のお言葉に重ねていた、として、その最後の言葉というのを、次のように記しています。

現代はかつてない程自然から遠ざかった時代ではないでしょうか。それと同時に私達はかつて人類が持っていたやさしい心、素直に驚き怖れる気持ちをごんごん失ってきたように思えます。考えてみれば、そういった人間らしい心は、自然からの贈り物に他ならないものです。人間の感性を回復させるためには、まず自然と親しくすることから始めねばなりません。

稲畑さんの講演の結論に相当する所を、読み返しながら、さまざまなことを考えさせられました。まず、この講演は、日本文学史の上で画期的な事件であったということです。次に、近代の科学文明を生み育ててきた欧米の知識人たちが、もともと人間の幸福の増進を目指したはずの科学の急速の進歩が自然の破壊を招く結果となり、それが人類の滅亡につながるのではないか、という深刻な危機感を人々に懐かせるに至ったことは、すでに指摘されていますが、そのことが、世界に類のない自然詩としての俳句に、西ドイツの人たちの強い関心が集まった、最も本質的な理由だと思えます。そうでなかったら、稲畑さんが俳句の季語について語る講演に、あのような熱狂的な反応を示すはずがなかったと思うからです。

(昭和六三・五)